Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-11-23

「生産性」に関する糸賀一雄の思想とヌスバウムの西洋政治哲学の比較

中野，リン
永岡，美咲(翻訳)

(Citation)
日本教育学会第８０回大会・ ラウンドテーブル ： 糸賀一雄の「生産性」をめぐる対話 ： 領域横断による読み解き
(Issue Date)
2021-08-25
(Resource Type)
conference object
(Version)
Accepted Manuscript
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008546

2021年8月25日

日本教育学会　第80回大会　ラウンドテーブル
糸賀一雄の「生産性」をめぐる対話—領域横断による読み解き
〈社会福祉学･重症児教育学･教育人間学･文化人類学〉

「生産性」に関する糸賀一雄の思想とヌスバウムの西洋政治哲学の比較

香港中文大学
中野リン (Lynne Nakano)
永岡美咲・訳

はじめに

今、「生産性」を問う意味①

- 世界各地の先進資本主義社会では「生産性」や「有用性（役に立つこと）」が重視され、経済や資本主義の発展を可能にしている
- あらゆる年齢・ジェンダー・能力レベルの人間にも価値を認める社会をつくる際の妨げとなっている
- グローバルな資本主義に異議を唱える社会運動が起こっている

はじめに

今、「生産性」を問う意味②

- 糸賀:重度障害者の権利に関して、現代的でグローバルな考え方を予知
- ヌスバウム:国連人間開発指数の基礎となる、可能力アプローチを提唱
- 糸賀とヌスバウム:社会で生産性が重視されることは、重度障害者の権利向上の妨げとなっていると指摘

はじめに

ヌスバウム

- 「生産性」が社会の一員の基礎であると決めつける社会契約論を再構築しようとした
- 可能力を達成しようとする個々人の尊厳・権利の重要性こそが、社会の共通認識であるべきだと主張

糸賀

- 教育の目的は、個々人の自己実現の尊重であり、個々人の社会貢献に焦点を当てるべきだと主張
- 「生産性」に対する理解を拡大するよう示唆

生産性に関する問題

ヌスバウム

- 1990年代、政治哲学者として、社会全体のウェルビーングを計るための基準作りに取り組んだ
- 自身が属するアメリカ社会でも、社会契約論が障害者を完全に取り込んでいないことに気づいた

糸賀

- 1950～60年代の日本では、障害児への教育が十分に認められていなかった
- 教育者・活動家として、日本の教育政策や、一般の人の障害者に対する見方を変えたいと願った

生産性に関する問題

ジョン・ロールズ（John Rawls）の社会契約論

- 社会には合理的で生産的な人が集い、法による支配に同意することが前提
- 障害のある人を社会に取り込む際に問題がある
  1. 生産的で「自分で自分の面倒をみることができる」人以外は、他の人に依存しているとみなされること
  2. 全ての人々がほぼ等しい能力を持ち、生産的な活動ができるとされる一方、女性・子ども・高齢者・障害者などの大きな集団を切り捨ててきたこと

この問題の解決には、市民とは誰かに関する新しい思考法と（相互有利性に焦点を合わせない）社会的協働の目的に関する新たな分析とが要求されるため、また社会的基本善としてのケアの重要性の強調も要求されるため、十分な取り組みとしては、古い理論をただ新たに適用することではなく、理論構造そのものの作り替えが必要となるだろう。

Because solving this problem [of social justice for people with disabilities] requires a new way of thinking about who the citizen is and a new analysis of the purpose of social cooperation (one not focused on mutual advantage), and because it also requires emphasizing the importance of care as a social primary good, it seems likely that facing it well will require not simply a new application of the old theories, but a reshaping of theoretical structures themselves.

マーサ・C・ヌスバウム、神島裕子訳（2012）『正義のフロンティア：障碍者・外国人・動物という境界を越えて』法政大学出版局、p. 6.

Nussbaum, Martha C. 2006. *Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership*. Cambridge, MA: Harvard University Press, p. 2.

生産性に関する問題

糸賀の生産性に関する懸念①

- 障害者の権利向上を阻害する
- 社会では障害児には価値がないとみなされている
- 障害のある子どもたちの人生にも意味があると考えられていない

しかし、それは、単に社会に有用な者になるということだけに意味があるからというのであろうか。それならば、既に見たように、社会的に役に立たぬといわれる者、役に立ちそうもない者は、対策から切りすてられるほかはない。

糸賀一雄（1968）『福祉の思想』日本放送出版協会、p. 108.

生産性に関する問題

糸賀の生産性に関する懸念②

- 障害者を政策や社会から排除することにつながる
- 当時の教育政策は、子どもたちに資源を注ぎ込めば、国家の発展という「リターン」が返ってくるという前提に基づいていた
- 近代日本社会の基本原則であると考えた

新たな道

ヌスバウムによる「人間の中心的な可能力」

①生命、②身体の健康、③身体の不可侵性、④感覚・想像力・思考力、⑤感情、⑥実践理性、⑦連帯、⑧ほかの種との共生、⑨遊び、⑩自分の環境の管理

- 人間の不完全性・依存性も人間の生活の一部である

マーサ・C・ヌスバウム、神島裕子訳（2012）『正義のフロンティア：障碍者・外国人・動物という境界を越えて』法政大学出版局、pp. 90-92.

Nussbaum, Martha C. 2006. *Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership*. Cambridge, MA: Harvard University Press, pp. 76-78.

「正常」な人間が経験するさまざまな種類の器質的損傷、ニーズ、そして依存性を承認することが、そしてまた「正常」な生活と、生涯にわたる知的な障碍のある人びとの生活とのあいだにある、紛れもない連続性

Recognizing the many varieties of impairment, need, and dependency that “normal” human beings experience, and thus the real continuity between “normal” lives and those of people with lifelong mental disabilities

マーサ・C・ヌスバウム、神島裕子訳（2012）『正義のフロンティア：障碍者・外国人・動物という境界を越えて』法政大学出版局、p. 185.

Nussbaum, Martha C. 2006. *Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership*. Cambridge, MA: Harvard University Press, p. 160.

人間は、生産的であることによって、他者からの尊重を勝ち取らなくてもよい。人間は、人間のニーズそれ自体の尊厳のなかに、支援に対する権利要求を有している。社会は幅広い愛着と気遣いによって結びついており、生産性に関係しているのはそのなかのほんの一部にすぎない。生産性は必要であり、またよいものでもあるけれども、社会生活の主要目的ではない。

We do not have to win the respect of others by being productive. We have a claim to support in the dignity of our human need itself. society if held together by a wide range of attachments and concerns, only some of which concern productivity. Productivity is necessary, and even good; but it is not the main end of social life.

マーサ・C・ヌスバウム、神島裕子訳（2012）『正義のフロンティア：障碍者・外国人・動物という境界を越えて』法政大学出版局、p. 185.

Nussbaum, Martha C. 2006. *Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership*. Cambridge, MA: Harvard University Press, p. 160.

新たな道

糸賀が訴えた道徳性

- 障害児との日々の生活を通じ、道徳性が生みだされると主張
- 教育の目的を、社会に役に立つ人をつくることから、人間として自己実現できるようにすることへとシフトすべきである
- 自己実現が社会貢献の方法となる

精神薄弱児の側に求められる道徳性は、彼らの側に立ち、彼らとともに生きるという次元で、どういう生き方をするかという実践的課題となって迫ってくるのである。

糸賀一雄（1968）『福祉の思想』日本放送出版協会、p. 51.

社会の役に立つようにという教育目標は、この人間の自己実現の側から見れば、結果のひとつとして理解されるべきであろう。社会の役に立つとは認められないような人間の自己実現の段階もある。しかし、一生涯ひとの世話にならなければ生きていけない重症な存在であっても、そのひとはりっぱな人間としての生きかたをしているという、そしてまた、することができるという理解の仕方のなかに、福祉の思想が育つのである。いったい社会に役に立つとか立たぬとかは、何をもっていいうるものであろうか。万人の発達が保障されなければならない。

糸賀一雄（1968）『福祉の思想』日本放送出版協会、p. 108-109.

新たな道

ヌスバウム

- 人権の観点から可能力を重視

糸賀

- 仏教的な視点から自己実現を重視

おわりに

糸賀とヌスバウムの主張

- 生産性は重要だが、人間の価値を決める際の中心であってはならない
- 人間の成長しようとする権利に焦点を当てた「人権アプローチ」を採る
- 個々人の具体的な経験を示し、人々から愛と思いやりを引き出そうとする
- 人間の依存性や弱さを認め、教育を通して人々の考え方を変化させるような社会変革を訴えている

＜謝辞＞
香港政府・大学教育資助委員会（University Grants Committee）研究資助局（Research Grants Council）（プロジェクト番号：14609818）の助成を受けています。